

福島県立図書館  
東日本大震災福島県復興ライブラリー

## ブックガイド

No. 20 2018. 3. 11

### ■原子力問題・過去の原発事故

#### 『原発と裁判官 なぜ司法は「メルトダウン」を許したのか』

磯村 健太郎／著 朝日新聞出版 2013. 3 543. 5/4 133

「裁判官は弁明せず」。判断の全ては判決文に書かれており、各所からの批判に対して多くを語らないことが裁判官の美德とされている。しかし、原発事故という甚大な被害を前に、原発稼働を差し止め得る立場だった元裁判官が、原発訴訟当時の思いを語った。原発稼働と停止という異なる判断を下した裁判官らの考え方の違いとは何だったか。また、最高裁を頂点とした司法組織が抱える課題とは。裁判官の「弁明」により原発事故発生の新たな要因が見えてくる。

#### 『原子力安全基盤科学 1 原子力発電所事故と原子力の安全』

京都大学学術出版会 2017. 9 539. 9/4 179/1

京都大学原子炉実験所が、2012年から2015年の4年間に渡り実施した、原子力安全基盤科学研究プロジェクトの成果に基づく図書です。3分冊からなり、それぞれ複数の専門家が執筆しています。第一分冊の本書では、原子炉の仕組みや原子力利用の歴史、福島第一原子力発電所事故の詳細、原子力安全、大学の取り組みなどを述べています。原子力の利用という問題について考えていく上での基礎となる事柄を、包括的に語る資料です。

#### 『みんなの知らない世界の原子力』

海外電力調査会／編著 日本電気協会新聞部 2017. 3 543. 5/4 173

世界の原発事情について、わかりやすい言葉でまとめられています。脱原発を決めた国、原発の使用を続ける国の両方の例が紹介され、世界の原発運転についての考え方、各国のエネルギー事情、原子力発電の問題、原子力発電をやめるリスクなどの様々な事項が、初心者にもわかりやすく解説されています。原子力発電やこれからの日本のエネルギーについて考える時に役立つ一冊。

## ■福島第一原発事故

### 『震災復興の政治経済学 津波被災と原発危機の分離と交錯』

齊藤 誠／著 日本評論社 2015.10 369.31/¥15X/

震災直後から様々な提言を行ってきた経済学者である齊藤誠氏が、震災時の政府の意思決定を問い直した一冊です。各種統計や事故調査報告書、作業マニュアルなどの膨大な資料から、政府が震災による資産への被害を過大に評価し、過剰な復興政策を策定した一方で、原発危機については政策が不徹底となったことを提示しています。「経済学を実践する者にとって、震災復興政策や原発危機対応に関する再検討は、知的な義務」と語る著者からは、社会学者としての真摯さと情熱が感じられます。

### 『リスクと生きる、死者と生きる』

石戸 諭／著 亜紀書房 2017.9 LS543.4/I30/1

リスクとどう向き合うかを考える「科学の言葉と生活の言葉」、幽霊を乗せたタクシーの噂をきっかけとした「死者と対話する人たち」、東日本大震災をどう語り継ぐかを問うた「歴史の当事者」の3章構成です。「喪失や悲しみは、徹底して個人のものだ」とある本書からは、どうしても数字が中心になりやすい震災報道のなかで、わかりやすさに囚われず、一人ひとりの話を聞いて言語化しようとする筆者の姿がみえます。BuzzFeed News 掲載に加筆。

### 『福島第一原発1号機冷却「失敗の本質」(講談社現代新書 2443)』

NHKスペシャル『メルトダウン』取材班／著 講談社 2017.9 543.5/¥179

福島第一原子力発電所事故を拡大させた重大な要因に、1号機の冷却の失敗があります。この失敗は、津波による電源喪失や、現場との情報共有がうまくいかなかった部分がよく問題視されますが、本書ではこの原因を丹念にたどる中、それだけではない日本独特の安全に対する考え方や、それに基づく仕組みとその運用の積み重ねがさらなる原因になっていたことを明らかにしています。事故調査についての報道は年々減っていますが、6年経った今でも検証により新たな事実が判明しています。検証結果をしっかりと見極め続け、今後には必ず活かさなければなりません。

## ■文学・体験記

### 『雨ニモマケズ 外国人記者が伝えた東日本大震災』

ルーシー・バーミンガム, デイヴ・イット・マコーネル／共著 えにし書房 2016.12 LS369.31/B8/1

日本をよく知る外国人記者2人による東日本大震災を生き延びた人々のルポルタージュです。福島県からの証言者は、桜井勝延南相馬市長と相馬市の漁師イチダヨシオさん・大熊町の原発作業員ワタナベカイ(仮名)さんの3人。豊富な知識と丹念な取材が悲しみを丁寧に綴っています。本書は2012年アメリカで出版され話題となり、今回市民グループ有志の翻訳を元に日本語版として改めて出版されました。(「図書館だより No.206」より)

『震災ジャンキー』

小林 みちたか／著 草思社 2017.8 369.31/ㄝ178/

国際 NGO に所属し難民支援に携わっていた著者が、東日本大震災以降継続的に行った被災地支援活動の記録です。本書には、支援する側・される側の気持ちのずれの歯がゆさ、一方的かもしれない正義感へのためらい、必要とされることを当然とってしまう怖さなど、訪れる先で感じた率直な思いと葛藤が綴られています。ある一人のボランティアの視点と心情に基づくものでありながら、現在まで続く状況の深刻さや人々のありようが浮かび上がってくる貴重な記録の一冊です。

『街からの伝言板 次の地震に遭う人に、どんな伝言を残しますか』

街からの伝言板プロジェクトチーム／編 ハーベスト社 2017.1 369.31/ㄝ171

仙台市中心街で震災を体験した方へのインタビューに答えた生の声が綴られています。困難な状況で各々が持ち場を守り、出来るだけ早く平常どおりに戻すために、人々がとった行動の記録とメッセージ。その時、その場所で体験し感じたことの中に、些細な日常が脅かされる震災の姿が浮びあがってきます。次にいつどこでおきるかわからない災害への対応のノウハウや心構えの大切さを後世に伝えます。

『サケが帰ってきた! 福島県木戸川漁協震災復興へのみちのり』

奥山 文弥／著 小学館 2017.10 LS664.6/01/1

震災以前は毎年7万~10万匹のサケが遡上し、本州でも有数の漁場であった檜葉町・木戸川。そんな木戸川のサケ漁も、震災・原発事故により存続が危ぶまれるほどの甚大な被害を受けました。

この存亡の危機に立ち向かったのは、釣り好きが高じて木戸川漁業協同組合に就職した青年・鈴木謙太郎さん。苦難に直面しながらも、一貫してサケ漁の復興へ歩み続ける姿が描かれます。未だ先が読めない被災地の復興に、強い道筋を示してくれる一冊です。漢字には読み仮名がふってあり、小中学生でも読みやすくなっています。

『ふくしま讃歌 日本の「宝」を訪ねて』

黛 まどか／著 新日本出版社 2016.9 915.6/ㄝ169

福島県には、連綿と続いてきた伝統や文化が存在します。震災によって伝統文化も危機を迎えましたが、多くは地域に愛着を持つ人々の力で守られました。本書では俳人の筆者が震災後の県内各地方を訪れ、「野馬追」や「原釜神楽」、「までい着」等を含めた多様な文化と手技を支える人々の様子を綴っています。手間や労力をかけることをいとわずに震災後も伝統を受け継いでいく、担い手への敬意を感じとることができます。

『記者たちは海に向かった 津波と放射能と福島民友新聞』

門田 隆将／著 KADOKAWA 2017.2 LS070.2/K1/1-2

2011年3月11日、津波の最前線で取材をしていた1人の地元新聞記者が亡くなった。自分の命とひきかえに地元の人を救って。彼の死は、仲間たちに「命」の意味を深く考えさせることになるが…。同時に、地震による停電と非常用発電機のトラブル、加えて、「支社」も「販売店」も「読者」も、全てが避難を余儀なくされた新聞エリアの欠落は、新聞発行そのものの危機を迎えていた。「命」とは何か。「新聞」とは何か。福島民友新聞を舞台に繰り広げられた新聞人たちの感動のノンフィクション。

『お～い、雲よ』

長倉 洋海／著 岩崎書店 2013.9 LS748/N8/1 748/ナ

いわき市、南相馬市など海辺の地域の震災後の写真と力強い言葉による写真集です。被写体が被災した家屋であっても、そこにはまぶしいような青い空とたなびく雲があります。書名は山村暮鳥の詩「雲」の中の一文、「おうい雲よ」からのものです。この詩は「ゆうゆうと 馬鹿にのんきさうぢゃないか どこまでいくんだ ずっと磐城平らの方までつづいてゆくんか」と続いています。私たちに力を与えてくれる一冊です。

『未来をはこぶオーケストラ ～福島に奇跡を届けたエル・システム～』

岩井光子／著 汐文社 2017.3 LS379.3/I9/1

エル・システムは、南米ベネズエラで「無償の音楽教育を全ての人に」と生まれた社会教育プログラム。そのエル・システムが、震災復興を目指して福島県相馬市で始まります。音楽を通して被災地の子どもたちの生きる力をはぐくむために設立されたエル・システムジャパン。その創成期から、相馬市の子どもたちがドイツでベートーベンの「運命」を演奏するまでの4年間を中心に丁寧に描いています。「音楽や芸術は「魂を養うもの」という言葉が心に響きます。子どもたちの、音楽に真剣に取り組む姿、はじける笑顔の写真から、福島のこれからの希望を感じる一冊です。

■農林水産業・動物

『あんぽ柿、復っ活！』

東洋大学経済学部国際経済学科藤井信幸ゼミナール [2017] LS628. 2/T1/1

ゼミの学生が県立図書館に調査に来ており、後日まとめたものが寄贈されました。副タイトルは、「福島県伊達市梁川町五十沢(イザワ)地区の復興に向けた実態調査と提案」。

地元の方々が納得できるような振興策として、「あんぽ柿」発祥の地という五十沢の強みを活かすこと、廃校となった五十沢小学校の再利用、PR 活動などを提言しています。若者の活力が伝わってくる本です。2016 年度福島県大学生の力を活用した集落復興支援事業。

■復興・防災

『福島は、あきらめない 復興現場からの声』

冠木雅夫／編 藤原書店 2017.3 LS369. 31/K69/1

2013 年 4 月から 3 年半にわたり毎日新聞に連載した「福島復興論」の対談や座談会をもとに、現在に至る動きを新たに書き加えたものです。編者は喜多方市出身であり、毎日新聞の論説委員長を経て、現在客員編集委員。前例のない長期避難による苦悩や農業の再生、内部被ばくの測定など健康不安・賠償問題などの放射能との闘い、避難地区の帰還へのハードルなど、福島の地で地道に活動してきた方や支えた方々81 人との対話の記録です。

『被災ママに学ぶちいさな防災のアイデア 40 東日本大震災を被災したママ・イラストレーターが 3・11 から続けている「1 日 1 防災」』

アベ ナオミ／著 学研プラス 2017.2 369.3/7+172

どんな災害であれ、被害を減らすためには生活の中で防災の備えが必要です。その防災のために必要なこと・ものはその人の性別や家族構成、職業、住んでいる場所などによって様々です。自分にあった防災の備えとはなにか、いざというときにどういう行動をとればよいのか、わが子・家族を守るにはなにが必要なのか。納得できて、毎日の生活に取り入れたいくなるような「ちいさな防災」を紹介した一冊です。

『女性のための防災 BOOK “もしも” のときに、あなたを守ってくれる知恵とモノ MAGAZINE HOUSE MOOK』

マガジンハウス 2017.12 369.3/33 14X/2

女性の防災には、必要なものがたくさん。特に、緊急性が低いと見られがちなもの、欲しいと言出しにくいものは、支援物資として届くことも少ないため、自分で用意しておく必要があります。この本では、スキンケア用品など女性の必需品のほか、メモ帳、ラップ、エッセンシャルオイルなど、女性でなくてもあると助かるものとその使い道も紹介されています。災害発生時の行動や、支援する側に立つときのアドバイスもついていて、まさに女性の防災を網羅した一冊です。

『復興デザインスタジオ 災害復興の提案と実践』

東京大学復興デザイン研究体／編 東京大学出版会 2017.10 518.8/㊦17X/

東日本大震災を契機に、東大工学系研究科の3専攻を中心として設立された、次世代の都市・地域・国土像を考える組織『復興デザイン研究体』。本書ではこの研究体の教育の柱となるプログラム「復興デザインスタジオ」の内容として、福島風景再生計画提案をはじめとした災害復興のあり方の提案を5つ紹介しています。異なる専門分野の学生・専門家たちの議論を通して生まれた多角的な提案は、今後の復興へのヒントが詰まったものになっています。中長期的な復興計画が進められている今、読んでおきたい一冊です。

■その他

『風の電話 大震災から6年、風の電話を通して見えること』

佐々木 格／著 風間書房 2017.8 146.8/㊦178

岩手県大槌町の高台に、もう二度と会えない相手に思いを伝える電話ボックス「風の電話」があります。東日本大震災から6年が過ぎカウントできただけでこの風の電話を訪れた人は2万5千人を超えたそうです。深い悲しみを背負った人はなぜ「風の電話」を訪れるのか。真の意味でのグリーフケアとはどうあるべきか。被災したすべての人の「心の復興」を強く願う思いが込められた一冊です。

『語り継ぐ、ふるさと南相馬（まなびあい南相馬 聞き書き選書 1）』

まなびあい南相馬／編集 まなびあい南相馬 2017.3 LS281.9/M2/1

震災後、高齢者の方々への聞き書きによって地域の記憶を残そうという活動がいくつか始まっているようです。この「まなびあい南相馬」による事業では加えて話すこと、思い出すことで高齢者に気力を取り戻してもらおうという目的もあるようです。シリーズ化の予定で、第1弾の本書では小高区の方々への聞き書きが収録されています。また詩人・若松丈太郎への聞き書きも収録します。

『震災があっても続ける 三陸・山田祭を追って』

矢野 陽子／著 はる書房 2017.1 386.122/㊦171

岩手県山田町の山田八幡宮・大杉神社で行われる、山田祭取材した記録です。震災後の「完全復活」に向けた描写に加えて、「昔はどうだったのか」という過去に関する聞き取りが多く、そこから町民性や「まつり」、「神様」に対する意識が浮かび上がってくる構成になっています。地域性、コミュニティ、団結力そして復興が抱える問題…。「自分の町」とは何か、どう作られていくのか、私達が復興の道の中で考えていきたいテーマを問いかけてくる本です。